

2007年12月1日～10日、ラオスとカンボジアへ音楽文化交流の演奏旅行に行ってきました。この活動は私の大学時代の友人が、3年前にラオスへリコーダーなどの楽器を贈ったことをきっかけに始まりました。夏にチャリティコンサート『フレンドシップガラコンサート』を明石と茨木で行い、今回の活動を実現させることができました。



まず始めに訪れたのはラオスの首都ヴィエンチャン。タイのバンコクで飛行機を乗り継ぎ、日本から約8時間かけて到着しました。12月は乾季で日本の9月下旬ぐらい、長袖シャツ1枚で過ごしやすい季節でした。

ラオスでは芸術教員養成学校と国立音楽・舞踊学校でのコンサート、ラジオ・テレビへの出演、リコーダーと歌指導を行いました。プログラムは日本の歌・オペラアリアのほか、現地でヒット中の「昴」や手拍子や掛け声でお客さんも参加してもらえる曲を用意しました。学生さん達は椅子によじ登ったり窓から首をつっこんだりして熱心に聴いてくれました。ラオスではマイクを通さずに演奏するということがほとんどないようで、マイク無しでどうして大きな声が出るのか、と何度も聞かれました。またコンサートの最後には、それぞれの学生さんが踊る伝統舞踊に私達がラオス語で歌い、踊りと歌のコラボレーションをしました。とても楽しかったです。



リコーダーと歌の指導は2日間行いました。生まれて初めてリコーダーを持った中学生達は2日間の特訓で見事なアンサンブルを披露できるまでになりました。また「大きな歌」をラオス語と日本語で歌い、日本語の時は私達が先導し、ラオス語の時は中学生達にラオス語を教してもらいました。みんなのきれいな声にびっくり！最後にささやかなコンサートを開きました。



次のカンボジアは、度重なる内戦からようやく復興しようという若者の熱いエネルギーに満ちた国でした。車やバイクの量も多く、にぎやかなネオンや喧騒で町が彩られていました。



カンボジアの首都プノンペンで、日本語を勉強中の大学生を対象にした日本の歌ワークショップと、カンボジアのテノール セティサクさんと一緒に「フレンドシップコンサート」を開きました。ワークショップでは「切手のない贈り物」「ビリーブ」を取り上げました。抽象的な日本語が難しかったようでしたが、最後はみんな大きな声で歌ってくれました。コンサートではシアヌーク殿下が作曲された「アプサラ」や「荒城の月」オペラ「椿姫」の2重唱などをセティサクさんと歌いました。クラシック音楽のコンサートはプノンペンでもなかなか無いそうですが、プログラムが進むごとに大きな拍手をいただくことができました。異国の私達の歌を熱心に聴いてくださったことが本当に嬉しく、改めて現地の方が温かく受け入れてくださったことへの感謝で胸がいっぱいになりました。



両国から「ぜひ来年も」と声をかけていただきました。今回の活動報告と次回の活動のためのチャリティコンサートをまた2008年8月茨木で行います。今回教えていただいたラオスとカンボジアの歌も披露する予定です。